研究報告

看護学生のグループホーム実習における認知症知識及び認知症高齢者イメージの変化とその要因の検討

棚﨑由紀子[1)]　奥田泰子[1)]　光貞美香[1)]　原哲也[1)]　河野保子[1)]

[1)] 宇部フロンティア大学人間健康学部看護学科

キーワード：看護学生，グループホーム実習，認知症の知識，認知症高齢者イメージ

Ⅰ．緒言

認知症高齢者の増加に伴いケアニーズが急速に高まっている現在において，認知症ケアの人材育成のあり方とともにケアの質が問われている．特に，認知症高齢者の理解を主軸に，尊厳性を尊重した関わりの提供できる専門職の育成が求められている．

当大学では，4年次前期の老年看護学実習において2日間のグループホーム実習を設定している．（1）グループホームの特徴を知り，認知症高齢者に対するケアの特殊性を理解する．（2）認知症高齢者の「今の世界」に寄り添うことができる．（3）共に時間を過ごすことにより，グループホームに入居している認知症高齢者の生活の場を知ることができる，の3項目を実習目標に掲げている．

実習前には，学生に対して，認知症の疾患，治療などの基礎知識とともに認知症高齢者の関わり方について復習しているが，高度なケア技術が求められる認知症ケアにおいて，知識・技術ともに未熟な状態で実習に臨んでいるのが現状である．

今回，学生の認知症高齢者イメージを高めることによって，実習の関わり方に変化を及ぼすことが可能ではないかと考えた．先行研究によると，看護学生は最初，認知症高齢者に対して否定的評価が先行するものの，学年進行に伴い肯定感が高まり，否定的イメージが緩和されると報告されている[1)]．また，認知症に関する情報や知識，認知症高齢者との接触によってイメージが変化すると述べられていることから，実習前より認知症の正しい知識の定着を目指して，学生の成長過程をサポートすることが重要だといえる．

更に，看護師では，認知症高齢者の捉え方がケアの基盤となっていると報告されている[2)]．学生のグループホーム実習を通して形成される認知症高齢者の捉え方も，今後のケアの礎となりえることを考慮し，認知症知識と認知症高齢者イメージの変化に着目し，評価することは重要であると考える．

以上を鑑み，本研究では，看護学生のグループホーム実習を通して変化する認知症知識と，形成される認知症高齢者イメージを明らかにする．さらに，学生の生活背景や実習に対する思い等との関連を検討し，今後のグループホーム実習の指導方法への示唆を得たい．

Ⅱ．目的

本研究の目的は，看護学生のグループホーム実習（以下，GH実習）における実習前後の認知症に関する知識及び認知症高齢者イメージの変化を明らかにすること．そして，その要因について検討することである．

Ⅲ．研究方法

1．調査対象

対象者は，老年看護学実習でGH実習を行っている看護系大学4年生の69名である．

2．調査方法及び期間

2010年5月から8月までの老年看護学実習のGH実習（2日間）前後に，研究者作成の無記名自記式質問票調査を実施した．

3．調査内容

1）属性及び生活環境

対象者の属性として性別，年齢の2項目，生活環境として祖父母との同居の有無，家族・親戚内の認知症高齢者の有無，認知症高齢者との接触経験，認知症に関する知識・情報源の6項目を設定した．各項目の回答は，実習前に求めた．

2）GH実習に対する思い

GH実習に対する楽しみ，認知症高齢者と関わりた

い思い，認知症高齢者と継続して関わりたい思い，認知症に関する疾患の理解及び認知症看護の理解の5項目を設定した．実習前後に，「全く思わない（1点）」から「とても思う（4点）」の4件法にて回答を求め，得点化した．実習後の質問は，過去形に置き換えて設定した．

3）認知症の疾患に関する知識（以下，認知症知識）

杉原ら[3]のアルツハイマー型認知症の知識量調査で，「痴呆疾患の治療ガイドライン」「アルツハイマー型痴呆の診断・治療マニュアル」「N式老年者用精神状態評価尺度」「痴呆老人からみた世界」「臨床地方学入門　正しい診療・正しいリハビリテーションとケア」を参考に作成した問題18問中17問を用いた．その17問は，認知症の一般問題3問，症状（中核，周辺，行動能力）に関する問題10問，治療に関する問題4問で構成されている．但し，本研究では，一問題に一症状を問う設定にするため，杉原らの問題「脳の老化によるものなので，歳をとるとだれもがなる．」の1項目については，「脳の老化によるものである．」「歳をとると誰もが罹患する．」の2問に分割した．更に，症状に関する問題「認知症の人は，皆同じ行動障害(問題行動)を示す．」を1問追加し，全19項目の問題を設定した．

正誤を回答する14項目と，中核症状及び認知症に伴う行動・心理症状：Behavioral and Psychological Symptoms of Dementia（以下，BPSD）の出現時期について「早期」，「中期」，「後期」，「分からない」，「出現しない」の5択から選択する5項目とし，正解を1点として合計点を算出した（19点満点）．回答は実習前後に求めた．

4）認知症高齢者に対するイメージ（以下，認知症高齢者イメージ）

（1）認知症高齢者イメージの変化の自覚

実習後に，認知症高齢者イメージが変化したと自覚しているか，「全く思わない（1点）」から「とても思う（4点）」の4件法にて回答を求め，得点化した．

（2）認知症高齢者イメージ

認知症高齢者イメージは，Semantic Differential method（以下，SD法）を用いた．形容詞対は，古谷野ら[4]が老人イメージ調査で使用した19項目と，研究者らが追加した7項目の全26項目を設定した．設問は「あなたは認知症高齢者に対して，どのようなイメージを持っていますか」とし，実習前後に，否定的な形容詞（1点）から肯定的な形容詞（5点）の5段階より評価を求め，得点化した．

5）実習目標の達成

実習目標である「認知症高齢者の今の世界への寄り添うことができる」，「認知症高齢者の生活を理解できる」の2項目を設定した．実習後に「全く思わない（1点）」から「とても思う（4点）」の4件法にて回答を求め，得点化した．

4．分析方法

調査データは，記述統計量を算出し検討した．認知症知識は，実習前後の合計得点と各問題の正誤をt検定にて比較した．その後，実習前後の認知症知識の平均合計得点をもとに「高知識群」と「低知識群」の2群に分類し，性別，生活背景，実習に関する思い5項目との関連をχ^2検定より分析した．

認知症高齢者イメージ26項目の実習前後の比較は，t検定にて分析した．その後，実習前後の認知症高齢者イメージについて因子分析を行い，構成因子を抽出した．実習後の下位尺度の平均値をもとに「高イメージ群」と「低イメージ群」の2群に分類し，性別，認知症知識や実習に関する思い5項目，実習目標の達成等との関連についてχ^2検定より検討した．

なお，全てのデータ分析には統計解析ソフトSPSS 19.0 J を用い，有意水準は5%未満とした．

5．倫理的配慮

学生には，調査前に本研究の趣旨，方法，プライバシーの保護について説明し，成績などの学業成績とは関係なく，協力は自由意志であることを述べた．そして，説明内容に承諾した学生へ質問票を配布し，質問票の提出による同意を得た者のみを研究対象とした．

Ⅳ．結果

対象者は看護系大学4年生の女性60名（87.0%），男性9名（13.0%）の69名であり，平均年齢は21.46±1.05歳であった（表1）．

表1　対象者の属性と生活背景

(n=69)

		度数(%)
性別	男性	9 (13.0)
	女性	60 (87.0)
平均年齢		21.46(1.05)
祖父母との同居経験		
同居中		22 (31.9)
	祖父と同居	4 (5.8)
	祖母と同居	8 (11.6)
	祖父母と同居	10 (14.5)
同居なし		47 (68.1)
認知症家族及び親戚		
あり		24 (34.8)
なし		45 (65.2)

1．生活環境

現在，祖父母またはどちらかと同居している学生は22名（31.9%）であった．また，家族や親戚等身近に認知症高齢者がいる学生は24名（34.8%）であった（表1）．

GH実習以前に，62名（89.9%）の学生が「GH実習以前の実習：49名（47.1%）」，「家族や親戚等の身近な認知症高齢者：24名（23.1%）」，「ボランティア，入学前の看護体験：各14名（13.5%）」による認知症高齢者との接触経験があった（複数回答）．全く接触経験の無かった学生は，7名（10.1%）であった（表2）．

表2　認知症高齢者との接触経験　(n=69)

		度数(%)
接触経験あり		62 (89.9)
	(複数回答)	
	実習	49 (56.3)
	ボランティア	14 (16.1)
	看護体験(入学前)	14 (16.1)
	その他	3 (3.4)
接触経験なし		7 (10.1)

認知症に関する様々な知識及び情報源については，「授業」が62名（47.0%）と最も多く，続いて「TV・新聞等のマスメディア」37名（28.0%），「インターネット」16名（12.1%），「書籍」12名（9.1%），「その他」5名（3.8%）であった（複数回答）．

2．グループホーム実習に対する思い（表3）

GH実習に対する楽しみについて，実習前には「とても思う」42名（60.9%），「少し思う」20名（29.0%），「あまり思わない」5名（7.2%），「全く思わない」2名（2.9%）であったのに対し，実習後は「全く思わない」1名（1.4%）を除き，全ての学生が「とても思う（60名：87.0%）」「少し思う（8名：11.6%）」のどちらかを回答していた．実習後は実習前に比べ，楽しかったと回答した者が有意に多かった（$\chi^2(3)=13.65$，$p<0.01$）．

認知症高齢者と関わりたい思いについては，実習前は「とても思う」25名（36.2%），「少し思う」32名（46.4%），「あまり思わない」10名（14.5%），「全く思わない」2名（2.9%）であったのに対し，実習後は「とても思う」40名（58.0%），「少し思う」28名（31.9%），「あまり思わない」6名（8.7%），「全く思わない」1名（1.4%）であった．実習前後の回答の違いは認められなかった．

表3　実習前後のグループホーム実習に対する思い　度数(%)　(n=69)

項目		とても思う	少し思う	あまり思わない	全く思わない	
実習の楽しみ	実習前	42(60.9)	20(29.0)	5(7.2)	2(2.9)	**
	実習後	60(87.0)	8(11.6)	0(0)	1(1.4)	
関わりたい思い	実習前	25(36.2)	32(46.4)	10(14.5)	2(2.9)	
	実習後	40(58.0)	28(31.9)	6(8.7)	1(1.4)	
継続して関わりたい思い	実習前	15(21.7)	40(58.0)	14(20.3)	0(0)	**
	実習後	38(55.1)	22(31.9)	8(11.6)	1(1.4)	
疾患の理解	実習前	1(1.4)	42(60.9)	24(34.8)	2(2.9)	**
	実習後	10(14.5)	56(81.2)	3(4.3)	0(0)	
認知症看護の理解	実習前	0(0)	31(44.9)	33(47.8)	5(7.2)	**
	実習後	12(17.4)	54(78.3)	3(4.3)	0(0)	

χ^2検定　**$p<0.01$

さらに，認知症高齢者と継続して関わりたい思いについては，実習前は「とても思う」15名（21.7%），「少し思う」40名（58.0%），「あまり思わない」14名（20.3%）であったのに対し，実習後は「とても思う」38名（55.1%），「少し思う」22名（31.9%），「あまり思わない」8名（11.6%），「全く思わない」1名（1.4%）であった．実習前よりも実習後は，継続して関わりたいと回答した者が有意に多かった（$\chi^2(3)=17.84$，$p<0.01$）．

認知症の疾患の理解については，実習前は「とても思う」1名（1.4%），「少し思う」42名（60.9%），「あまり思わない」24名（34.8%），「全く思わない」2名（2.9%）であったのに対し，実習後は「あまり思わない」3名（4.3%）を除き，全ての学生が「とても思う」10名（14.5%），「少し思う」56名（81.2%）と回答していた．実習後は実習前に比べて，疾患が理

解できたと回答する者が多かった（$\chi^2(3)=27.7$, $p<0.01$）.

認知症看護の理解については，実習前は「少し思う」31名（44.9%），「あまり思わない」33名（47.8%），「全く思わない」5名（7.2%）であったのに対し，実習後は「あまり思わない」3名（4.3%）以外は「とても思う」12名（17.4%）「少し思う」，54名（78.3%）と回答していた．実習後は実習前と比べ，認知症看護が理解できたと回答した者が多かった（$\chi^2(3)=48.22$, $p<0.01$）.

GH実習に対する思い5項目間の関係については，実習後の「GH実習が楽しかった思い」と，「認知症高齢者と関わりたい思い」，「継続して関わりたい思い」にそれぞれ正の相関が認められた．GH実習の楽しかった思いが強いと認知症高齢者と関わりたい思いや継続した関わりたい思いも強くなることが明らかとなった（$r=0.61$, $p<0.01$: $r=0.51$, $p<0.01$）.

表4　実習前後の認知症に関する知識の正解率の比較

(n=69)

問題			正解率(%) 前	正解率(%) 後	
一般		1. 認知症の原因には、「アルツハイマー病」「脳血管性」「その他」の種類がある。	87.0	88.4	
		2. 認知症は初老期でも高齢期でも起こるが、高齢期に起こることが多い。	85.5	94.2	
		3. 認知症は脳の老化によるものである。	55.1	58.0	
		4. 認知症は年をとると誰もが罹患する。	94.2	94.2	
		5. 日時や場所の感覚がつかめなくなるといった症状が出る。	97.1	98.6	
		6. 物事を判断する力が徐々に衰える。	87.0	92.8	
		7. 記憶だけが悪くなる病気である。	91.3	92.8	
		15. 認知症の人の人格が崩壊する時期は。	34.8	37.7	
		19. 認知症の人が、同じことを何度も繰り返して言うようになる時期は。	53.6	66.7	*
		8. 徘徊行動が出る場合が多い。	11.6	7.2	
		9. 物盗られ妄想が出てくることが多い。	87.0	76.8	
		10. 認知症の人は、皆同じ行動障害（問題行動）を示す。	87.0	92.8	
		16. 認知症の人が、身の回りのことができなくなる時期は。	34.8	46.4	
		17. 認知症の人が、少量のお金を管理することができなくなる時期は。	42.0	58.0	*
		18. 認知症の人が、一人暮らしできなくなる時期は。	43.5	55.1	
治療		11. 早期治療をしても進行を遅らせることはできない。	87.0	84.1	
		12. 周囲の対応によっても徘徊等の問題行動は軽減しない。	88.4	98.6	*
		13. 現在、治療法は全くない。	20.3	21.7	
		14. 症状を緩和させたり、進行を遅らせたりする薬がある。	78.3	81.2	

▒ 正解率50%以下　　t検定　　*$p<0.05$

3．認知症知識（表4）

認知症知識全19問の平均合計得点は，実習前12.7±2.4点，実習後13.5±2.2点であり，実習前に比べて実習後高得点になった（$t(68)=-2.52$, $p<0.05$）．しかし，正解率が50%以下の問題が，実習前は19問中6問，実習後は4問あり，特に，問8「徘徊行動が出る場合が多い」の正解率は，実習前11.6%（8名），実習後7.2%（5名）と最も低かった．更に，実習前後で有意に正解率が上昇したのは，問12「周囲の対応によっても徘徊等の問題行動は軽減しない」，問17「認知症の人が，少量のお金を管理することができなくなる時期は」，問19「認知症の人が，同じことを何度も繰り返して言うようになる時期は」の3問のみであった（$t(68)=-2.41$, $p<0.05$; $t(68)=-2.02$, $p<0.05$; $t(68)=-2.12$, $p<0.05$）.

次に，実習前後の認知症知識「高知識群」「低知識群」の2群と要因の検討をした結果，全ての項目において差異は認められなかった．

4．認知症高齢者イメージ

実習後の認知症高齢者イメージが変化したという自覚については，「あまり思わない」3名（5.8%），「少し思う」31名（47.7%），「とても思う」31名（47.7%）であり，ほとんどの学生が実習を通して認知症高齢者イメージが変化したと回答した．

それを反映してか，形容詞対26項目のうち2項目を除き全ての項目が，実習前よりも実習後に有意に肯定的な評価へと変化した（表5）．

また，平均値3.0以上の肯定的評価が示されたのは，実習前［無愛想な⇔愛想の良い］［冷たい⇔あたたかい］［憎らしい⇔愛らしい］等の8項目から，実習後の20項目へと増加した．逆に，平均値3.0以上に至らなかった6項目は，［弱い⇔強い］［遅い⇔早い］［落ち着きのない⇔落ち着きのある］等であった（表5）．

表 5　認知症高齢者イメージの比較　26 項目

(n=69)

形容詞対		実習前 (平均値±SD)		実習後 (平均値±SD)		
受動的な	能動的な	2.68	.84	2.84	.90	
暗い	明るい	3.04	.94	3.74	.90	＊＊
頑固な	柔軟な	2.43	.90	3.00	.97	＊＊
嫌いな	好きな	3.14	.75	3.75	.86	＊＊
消極的な	積極的な	2.86	.93	3.38	.96	＊＊
劣った	優れた	2.65	.74	3.04	.76	＊＊
遅い	速い	2.19	.84	2.39	.75	＊
枯れた	みずみずしい	2.58	.69	2.97	.69	＊＊
きびしい	やさしい	3.19	.90	3.80	.98	＊＊
下品な	上品な	3.01	.50	3.28	.70	＊＊
弱い	強い	2.38	.91	2.70	.86	＊＊
無愛想な	愛想のよい	3.35	1.01	3.77	.94	＊＊
地味な	派手な	2.97	.71	2.99	.56	
冷たい	暖かい	3.43	.90	3.96	.79	＊＊
鈍感な	機敏な	2.83	.91	3.06	.92	
落ち着きのない	落ち着きのある	2.26	.80	2.77	.96	＊＊
騒がしい	静かな	2.72	.79	3.06	.73	＊＊
さびしい	にぎやかな	2.67	1.02	3.07	1.10	＊
不活発な	活発な	3.13	.80	3.35	.84	＊
悲観的な	楽観的な	2.71	.84	3.19	.84	＊＊
強情な	素直な	2.94	1.17	3.64	1.03	＊＊
灰色	バラ色	2.64	.79	3.10	.62	＊＊
孤立	連帯	2.36	.84	3.00	1.08	＊＊
疎遠	親密	2.78	.74	3.39	.75	＊＊
不健康	健康	2.88	.70	3.41	.73	＊＊
憎らしい	愛らしい	3.25	.63	3.88	.93	＊＊

t 検定　＊p<0.05　＊＊p＜0.01　　□ 平均値 3.0 以下

次に，実習前後それぞれの認知症高齢者イメージの構造を明らかにするため，形容詞対 26 項目について主因子法，プロマックス回転による因子分析を行った．因子負荷量 0.4 以下となった形容詞対を削除した．実習前は 15 項目より 3 因子を抽出した（表 6）．

実習前の第 1 因子は［騒がしい⇔静かな］［疎遠⇔親密］［落ち着きのない⇔落ち着きのある］等の 10 項目（α＝.90），第 2 因子は［暗い⇔明るい］［消極的な⇔積極的な］の 2 項目（α＝.85），第 3 因子は［地味な⇔派手な］［受動的な⇔能動的な］［弱い⇔強い］の 3 項目（α＝.64）であった．これら 3 因子の累積寄与率は 53.65％であり，各因子の内的整合性は Cronbach1 の α 係数により確認され(前述)，下位尺度としての信頼性が認められた．また，各因子得点の平均値は第 1 因子：3.30±0.63，第 2 因子：3.56±0.87，第 3 因子：2.83±0.59 であり，第 3 因子の平均値のみ 3.0 を下回った否定的評価であった．さらに，第 1 因子と第 2 因子との因子間には，正の相関が認められた（r＝0.59，p＜0.01）．

表 6　実習前の認知症高齢者イメージ(15 項目)

形容詞対	因子負荷量		
	第 1 因子	第 2 因子	【活力性】
騒がしい	.884	-.291	-.089
親密 R	.762	-.146	.058
冷たい	.698	.181	-.085
さびしい	.695	.214	-.257
憎らしい	.682	.103	.061
落ち着き	.661	-.063	.066
不健康	.645	.079	.224
孤立	.610	.132	-.009
下品な	.546	.092	.078
悲観的	.446	.211	-.010
暗い	-.048	.964	-.003
消極的な	-.023	.824	.069
地味な	-.037	.058	.731
受動的な	-.137	.019	.596
弱い	.222	-.041	.555

主因子法　プロマックス回転　n=69

KMO 値=0.823　累積寄与率＝53.65％　R 逆転項目

実習後は15項目より3因子を抽出した（表7）．実習後の第1因子は［騒がしい⇔静かな］［落ち着きのない⇔落ち着きのある］［悲観的な⇔楽観的な］等の8項目（α＝.88），第2因子は［不活発な⇔活動的な］［消極的な⇔積極的な］［灰色⇔バラ色］等の4項目（α＝.75），第3因子は［地味な⇔派手な］［弱い⇔強い］［受動的な⇔能動的な］の3項目（α＝.64）であった．これら3因子の累積寄与率は50.38%であり，各因子の内的整合性はCronbach1のα係数により確認され（前述），下位尺度としての信頼性が認められた．また，各因子得点の平均値は第1因子：3.34±0.66，第2因子：3.40±0.64，第3因子：2.83±0.59であり，第3因子の平均値のみ3.0を下回る否定的評価であった．さらに，第1因子と第2因子との因子間には，正の相関が認められた（r＝0.70，p＜0.01）．

表7　実習後の認知症高齢者イメージ(15項目)

形容詞対	因子負荷量		
	第1因子	第2因子	【活力性】
騒がしい	.888	-.179	-.198
落ち着き	.778	-.171	.059
悲観的	.715	-.056	.003
不健康	.667	.026	.211
嫌いな	.629	.261	-.024
強情	.596	.168	-.069
冷たい	.494	.360	-.056
孤立	.446	.247	.027
不活発な	-.126	.832	-.168
灰色	-.094	.752	.019
消極的な	-.001	.515	.276
無愛想な	.279	.472	.053
地味な	-.032	-.105	.833
受動的な	-.170	-.008	.631
弱い	.178	.007	.519

主因子法　プロマックス回転　n=69
KMO値=0.85　　累積寄与率＝50.38%

実習前後の因子分析による認知症高齢者イメージの構造化は，第1因子では［騒がしい⇔静かな］［落ち着きのない⇔落ち着きのある］［悲観的な⇔楽観的な］等の6項目が，第2因子では［消極的な⇔積極的な］の1項目が，第3因子では3項目すべてが共通していた．よって，共通した第3因子を【活力性】と命名した．

1）性別との比較

実習前後の各因子得点を性別と比較した結果，実習前の【第1因子】【第2因子】，実習後の【第2因子】は，男子に比べて女子が有意に肯定的評価であった（実習前：t(18)＝2.38，p＜0.05，t(67)＝3.06，p＜0.01　実習後：t(67)＝2.66，p＜0.05）．

2）GH実習に対する思い

因子分析で抽出された実習後の3因子を［高イメージ群］［低イメージ群］の2群に分類し，GH実習に対する思い5項目と分析した結果，【第1因子】と【第2因子】の高イメージ群は，低イメージ群と比べて認知症高齢者と関わりたい思いの強い学生が多かった（$\chi^2(3)=9.94$，$p<0.05$ 図1；$\chi^2(3)=8.37$，$p<0.05$ 図2）．また，【第1因子】の高イメージ群は，低イメージ群と比べ認知症高齢者と継続して関わりたい思いが強い学生が多かった（$\chi^2(3)=9.71$，$p<0.05$ 図3）．

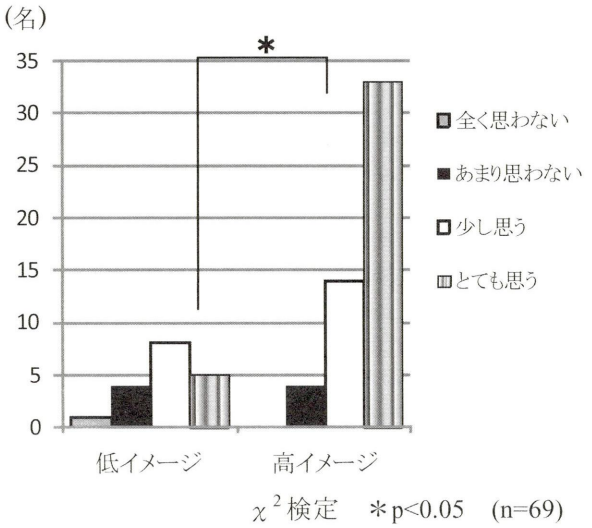


図1　実習後の【第1因子】イメージと関わりたい思いとの関連

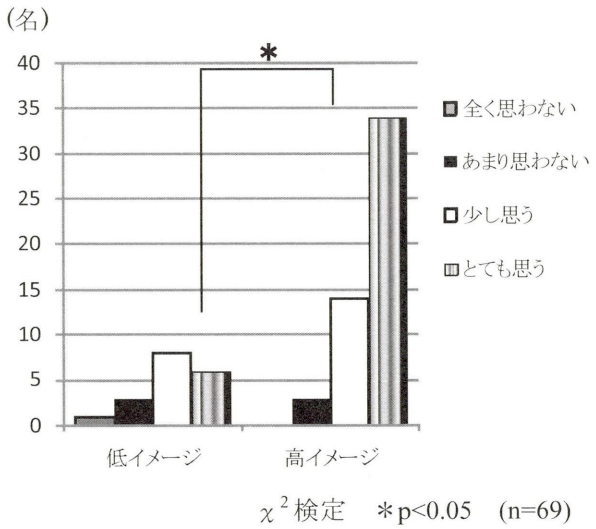
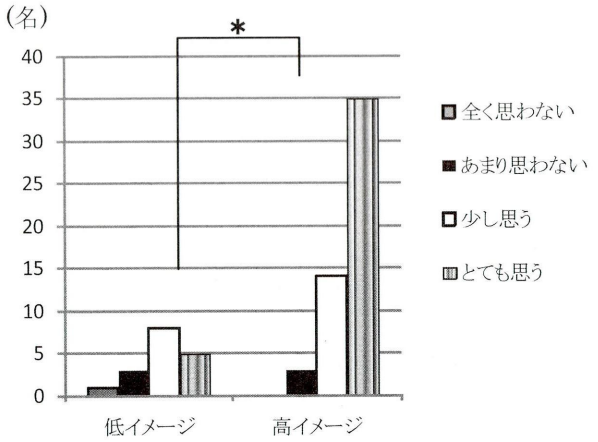


図2　実習後の【第2因子】イメージと関わりたい思いとの関連



χ^2検定　＊p<0.05　　(n=69)

図3　実習後の【第2因子】イメージと継続して関わりたい思いとの関連

実習後の【第1因子】と認知症高齢者と関わりたい思いに，正の相関が認められた（r=0.41，p<0.01）．

3）認知症知識

実習後の認知症高齢者イメージ3因子と，実習後の認知症知識の合計得点には差異は認められなかった．

5．実習目標の達成

実習目標である認知症高齢者の今の世界への寄り添いについては，「あまり思わない」1名（1.4%）を除き，全ての学生が「少し思う」46名（66.7%）「とても思う」22名（31.9%）であり，ほとんどの学生が目標を達成できたと感じていた．

認知症高齢者の生活に関する理解については，「少し思う」22名（31.9%）「とても思う」47名（68.1%）であり，全員が達成できたと感じていた．しかし，実習目標の達成と，実習後の認知症高齢者イメージ3因子，認知症知識との関連は認められなかった．

V．考察

1．生活背景

当大学では，認知症高齢者を対象にしたGH実習を，4年前期老年看護学実習の中で実施している．入学前に，既に認知症高齢者との接触経験がある学生や，GH実習以前の臨地実習で関わった学生が大半を占めており（62名，89.9%），GH実習で認知症高齢者と初めて接触した学生は7名（10.1%）と少数であった．

入院患者のほとんどが高齢者という現状をふまえると，今後は更に老年看護学実習以前の臨地実習で認知症高齢者との接触経験が増える．現在の授業時期の検討などを含めた今後の対策が必要である．

2．認知症に関する知識

今回の結果では，認知症知識（全19問）の実習後の平均合計得点は，実習前と比べ有意に高くなっていた．また，正解率が50%以下であった問題も実習前の6問から4問へと減少していたことから，2日間のGH実習であっても認知症高齢者との関わりを通して，知識を正しく定着させる場としてGH実習は活用できることが示唆された．中でも，正解率が有意に上昇した問12「周囲の対応によっても徘徊等の問題行動は軽減しない」については，GH実習中のケア職員の対応を通して，学生の実践的学びにつながったのではないかと考えられた．

また，正解率の最も正解率の低かった問8「徘徊行動が出る場合が多い」については，『認知症＝徘徊行動』というイメージを引きずった誤った知識による影響ではないかと考えられた．先行研究では，TVや新聞，書籍など散発的に伝えられる様々な情報からは，必ずしも正しい理解につながらないと報告されている[3]．今後は，GH実習前後の学生の知識量を評価し，GH実習までの準備期間を実習導入しやすいように整えること，またGH実習中，後の指導体制を検討することが重要であると考える．

3．認知症高齢者イメージ

今回，認知症高齢者イメージ評価として用いた形容詞対26項目のうち，20項目が実習前と比べて有意に高評価となった．また，平均値3.0以上の肯定的評価を示した項目も8項目から21項目へと増加した．

以上のことから，GH実習での直接的な関わり（体験）を通して，学生の認知症高齢者イメージは否定的なものから肯定的なものへと変化することが示唆された．

実習前後の認知症高齢者イメージは，因子分析により3因子に構造化され，ほとんど同じ形容詞対に分類された．特に，【活力性】については，3項目全ての形容詞対が共通していた．

しかし，実習前後の【活力性】は，どちらも3.0を下回る否定的評価であった．小泉ら[7]は，看護学生の高齢者に対するイメージについて，健康の概念枠組みより身体的・精神的能力に注目する教育を受けていることで，体力の衰えた弱い存在として捉えていると述べている．認知症高齢者についても同様であり，あまり動的活動の無い認知症高齢者の姿から，弱い，受動的な，地味なイメージを抱いたのではないかと考えられる．

また，逆に実習前後の【第1因子】【第2因子】は，共に3.0以上の肯定的評価であった．特に，高齢者の円熟みに関連した形容詞対が多かったことから，学生が認知症高齢者を一個人の存在として尊敬の念をもって捉えようとした結果ではないかと考えられた．

学生の多くは，認知症高齢者との関係性を構築する初段階で，何を話しているのか分からない，何度も同

じことを繰り返しているなど，会話の成立しない，かみ合わないといった認知症によるコミュニケーション障害への対応に，戸惑いを感じていた．自問自答し関わる中で，日頃から大切にしているケアの視点を，ケアスタッフよりアドバイスしてもらうことで，少しずつではあるが認知症高齢者の変化や些細な反応を捉えられる力が養われたのではないかと考える．

認知症のある患者としてではなく，一高齢者として関わるきっかけとなり，肯定的なイメージへと変化してきたのではないかと推察する．田中らは[5]，学生は実習を通して「その人らしさの保持」という具体的イメージに変化し，肯定化すると報告している．また，上野らは[6]「尊厳性」「親密性」に関する肯定感は学年が上がるにつれ高まり，否定的イメージが次第に緩和されるとの報告している．本学の学生も同様に，2日間という短い実習期間ではあったが，4年間で培われた知識・技術の統合により認知症高齢者を一個人として捉えられるようになったことが，イメージの変化につながったのではないかと考える．

4．認知症知識と認知症高齢者イメージの変化要因

今回の結果においては，認知症知識との変化要因は明らかにならなかった．また，認知症知識と認知症高齢者イメージとの関連も明らかにならなかった．

認知症高齢者イメージについては，先行研究において，幼少時の高齢者との交流経験が多いものほど肯定的イメージである[8,9]と報告されているが，今回の結果では関連は認められなかった．また，老人イメージの調査ではあるが，身内の世話や実習等で老人の世話を経験した学生の方がより肯定的イメージに変化した[10,11]との報告があるが，この点においても関連は認められなかった．

しかし，今回，GH実習を通して形成された認知症高齢者と関わりたい，今後も継続して関わりたいという思いが，認知症高齢者の肯定的イメージにつながったことは示唆された．特に，実習後の認知症高齢者イメージ【第1因子】は，認知症高齢者との関わりたい思いと正の相関が認められた．実習中に認知症高齢者と同じ時間を過ごし，共に行動することを通して分かりあえたという経験が重要であると考えられた．

今回は，認知症知識との関連は認められなかったが，今後は認知症高齢者との関わりを評価し，教育方法を検討することも必要である．

Ⅵ．本研究の限界

認知症知識及び認知症高齢者イメージの変化要因を検証するにあたり，実習における個々の経験等を詳細に検証するとともに一般高齢者とのイメージの違いも考慮して検証することが必要であったと考える．今後の実習評価を行う上での課題としたい．

Ⅶ．結論

本研究は，看護学生のGH実習における認知症に関する知識及び認知症高齢者イメージの変化とその関連要因を明らかにすることを目的に質問票調査を実施し，以下の結論を得た．

1．認知症に関する知識は，実習前と比べ実習後に向上した．
2．認知症高齢者イメージは，実習前は否定的イメージを抱いていたが，実習後には肯定的イメージへと変化した．
3．認知症知識と認知症高齢者イメージとの関連は認められなかった．
4．実習後の認知症高齢者と関わりたい思いと認知症高齢者イメージとの関連が示唆された．
5．今後，認知症高齢者への関わりだけではなく，正しい知識に基づいた肯定的評価となるように，教育内容及び評価方法について検討していくことが課題として残された．

謝辞

調査にご協力いただきました皆様に心から感謝申し上げます．

引用・参考文献

1) 桂晶子，佐藤このみ：看護大学性が抱く認知症高齢者のイメージ，宮城大学看護学部紀要，11 (1)，p.49-56，2008.
2) 長畑多代，松田千登勢等：介護老人保健施設で働く看護婦の痴呆性高齢者とその言動に対するとらえ方，大阪府立看護大学紀要，8 (1)，p.19-27，2002.
3) 杉原百合子，山田裕子，武地一：一般高齢者が持つアルツハイマー型認知症についての知識量と関連要因の検討，日本認知症ケア学会誌，4 (1)，p.9-16，2005.
4) 古谷野亘，児玉好信ほか：中高年の老人イメージ－SD法による測定－，老年社会科学，18 (2)，p.147-152，1997.
5) 田中敦子，鳴海喜代子：認知症高齢者への受容的感情とその影響要因に関する縦断的中差，埼玉県立大学紀要，7，p.59-66，2006.
6) 上野まり，廣川聖：認知症高齢者のグループホームでの一日実習における看護学生の学び（第一報）学生の記録から，神奈川県立保健福祉大学誌，6 (1)，p.3-11，2009.

7) 小泉美佐子，上本純子：看護学生の老人イメージ －Semantic Differential －，筑波医短大研報，11，p.33-39，1990.
8) 中野いく子：児童の老人イメージ －SD 法による測定と要因分析－，社会老年学，34，p.11-22，1990.
9) 中野いく子，冷水豊など：小学生と中学生の老人イメージ －SD 法による測定と比較－，社会老年学，39，p.11-22，1994.
10) 鳴海喜代子：看護学生の老人観に関する研究，第 4 報，千葉大学看護学部紀要，12，p.11-19，1990.
11) 菱沼典子，太田喜久子など：看護学生の老人イメージについての一考察，看護教育，36 (8)，p.730-735，1995.
12) 奥村由美子，久世淳子：大学生の高齢者イメージに関連する要因 －認知症高齢者と健常高齢者のイメージの比較－，日本福祉健康科学論集，12，p.31-38，2009.
13) 前畑夏子，服部ユカリほか：老人看護実習による看護大学性の老イメージの変化，富山医科薬科大学看護学会誌，2，p.103-116，1999.
14) 木村誠子，片岡万里：看護学生に老年看護学実習前における認知症高齢者イメージの特性 ――般高齢者と認知症高齢者に対するイメージの比較－，高知大学学術研究報告　医学・看護学編，55，p.37-43，2006.